

Graham Greene 研究

The Basement Room 論

宮野祥子

I

Graham Greene の短篇 *The Basement Room* はすでに良く知られた作品で、中年の夫婦とその夫の恋人との葛藤及び破滅という通俗的なドラマを偶然目撃し、巻き込まれてしまった一人の少年に与えた精神的ショックを扱っており、その子供の心理描写の巧みであることは有名である。7才の少年 Philip は両親の留守に召使 Baines 夫婦の愛と憎しみの世界に踏み入り、そこで負わされた責任と、そこに流れている人生の激しい力を耐え得ず逃げ出してしてしまうのである。その彼を作者は死んでゆく老人 Philip と overlap して描出しているのである。

これは幼い頃の体験が人の一生を決定するのにいかに重大な意味をもっているかを物語っているのだ、という読み方も可能である。しかしこの単純な筋を描出する作者は登場人物に豊富な比喻とイメージを与えている。それは単に story の興味を増すのみならず、幼くて実は本当にはおとなの嫉妬も愛情もわからない Philip を表現する手段であるとも考えられる。或は彼の理解を補うと同時に、理解できないために逆に Philip が感じとった具体的な状況の背後に隠されている真の意味をも象徴していると考えられるのである。そこで、主な人物 (Baines, Mrs. Baines, Emmy) に与えられた比喻表現やイメージを中心に、Philip が二日の間に見たこと、経験したことを筋を追って考察し、そして少年と老人を重ねて描写している Philip の変貌の意味を理解したいと思う。尚テキストは *Twenty-One Stories*, 1965 を使用した。

II

さて Philip の変貌の背後を探る為に、まず彼が発見し、また Baines への愛情故に巻き込まれてしまったおとなの世界——三人のおとな、Baines 夫婦と Emmy によって開かれた未知の世界、彼等と彼等の行動によって展開され象徴されている世

界——が表わしているものを考えてみたいと思う。

i)

両親が出かけ、乳母もまだ到着していないので Philip は広い家中何処にでも自由に入出りできる。彼は期待にみちてこれが人生だ <this is life> と思うのである。そして初めて Baines 夫婦の住いである地下室へと足を踏み入れるのである。そこで Philip が発見したのは主人夫婦が留守なので、少し気楽になりシャツ姿でいる Baines である。Philip に ginger-beer とケーキをご馳走している Baines の姿は次のように描かれている。

With an air of regret for something lost he took a long draught of ginger-beer.

He sat there over his ginger pop with the resigned dignity of an exile; Baines didn't complain; he had chosen his fate; and if his fate was Mrs. Baines he had only himself to blame.

ここには失ったものに今なお心を残しながら、故国を遠く離れねばならなかった流刑人或は亡命者として Baines が描出されている。しかもその運命を自らの責任において高潔な態度で耐えようとしている雄々しい Baines である。しかしその底には、このような立場に追い込み、そして檻の中にあるような生活へ閉じこめた妻に対する絶望的な憎しみがある。昼食の折、Philip は午後の散歩に出かけたいと云うのであるが、Mrs. Baines は一言のもとに拒絶してしまう。そのとき Philip の眼が捕えた妻に対する Baines の憎しみの目つきを説明した <the sad hopeless hate of something behind bars> には、広い自由な世界を奪われて檻の中に捕えられた動物、自由を奪った者に対して無力を感じながらも、憎み、反抗せざるを得ない獣の悲哀が表われているようである。この様な捕れ人である Baines が、機会があれば明日にでも帰りたいと願っている懐しい生活とは、植民地で40人もの黒人を部下としてしかも彼等に対して寛大な理解と愛情 <I couldn't help loving them.> を示して生きていた男らしい生活 <It was a man's job.> であった。

このように男らしい仕事という憧れの国を遠く望みながらさ迷う人、Baines に対

して Mrs. Baines はまず第一に人生の喜びに無縁な人として描かれている。仕事が第一、楽しみはあと、と云う彼女は家中を忙しげに歩き廻り、何もかもきちんとして整理整頓し、務めをきちんとして果す有能な召使である。しかしその姿は細かな事にこせこせとよく気付いて愛情がない <meticulous and loveless> と形容されている。これは仕事に喜びを感じないため、その注意深さがかえって神経質な嫌味になることを表わしている。この <loveless> であることは、彼女が自分の仕打が相手にどのように受けとめられるかということに無感覚な人間としても表わされている。相手にひどい仕打をしても、その次に何か美味しい物を与えればそれで埋め合せがつく <any injustice could be counterbalanced by something good to eat> という考えは、相手に対する思いやり、愛情の欠如を示している。これは Philip の目には気まぐれ <her changes> とうつつる自己中心の表われでもある。Philip に接する彼女の態度は自分の都合の良いように彼を扱うため、両極端に走りがちである。彼女は媚諷うようないかにも召使らしい態度 <servile, ingratiating> をとるかと思えば横柄で威圧的な <authoritative, arrogant> 彼女へと豹変するのである。この様な Mrs. Baines の目つき、声、姿などを作者は次のように形容している。目に関して <her hateful peevish eyes> <she watched him with a joyless passionate glitter> などの描写があり、声については次のように描写されている。

He heard Mrs. Baines's voice like the voice in a nightmare when the small Price light has guttered in the saucer and the curtains move; it was sharp and shrill and full of malice, louder than people ought to speak, exposed.

憎々しげで気むづかしく、喜びのない熱情をこめたざらざら光る眼、悪夢のなかで聞くような鋭い、悪意にみちた、包み隠すことを忘れて何もかも曝け出して、感情をむき出しにした甲高い声——これらの比喻とイメージは Mrs. Baines を好ましい面と嫌な面の両方を具えた人間としてではなく、怒りと悪意だけで生きている存在として描いているようである。それは人の笑い者になるような存在ではなく、次の数行が示すようにできるだけ忘れていたい存在である。

she was darkness when the night-light went out in a draught;
she was the frozen blocks of earth he had seen one winter in a

graveyard when someone said, "They need an electric drill"; she was the flowers gone bad and smelling in the little closet room at Penstanley. There was nothing to laugh about. You had to endure her when she was there and forget about her quickly when she was away, suppress the thought of her, ram it down deep.

彼女は暗闇、凍りついて人の力ではどうにもならない墓地の土塊、捨て去らねばならない枯れて腐った花、側にいればその存在をひたすら耐え、眼に見えなくなれば出るだけ早く忘れ、その記憶を土の中に深く打ち込んで、人の心から追い出してしまわねばならぬ存在である。このように人から忌み嫌われる存在とは一体どのようなことを意味しているのであろうか。

次の引用は Philip が生れて初めて、ひとりで散歩に出かけてしまう場面の描写である。

and suddenly even the upper part of the house became unbearable to him as he thought of Mrs. Baines moving round shrouding the sofas, laying out the dust-sheets

ここに描かれているのは主人夫婦の部屋を廻って、ソファーに塵よけの布をかけている Mrs. Baines の姿であるが、それが Philip には我慢のならぬ程嫌な <unbearable> ことに思われるのである。それは彼が彼女を元来嫌っているからでもあるが、彼女の動作おゝう <shroud> が、経帷子を着せるということを暗示し、広げる <layout> が、入棺の準備をするという葬式のイメージを伝えているからではないだろうか。従って <unbearable> は彼女の存在に対してであると同時に、死ということがらに対してでもあると考えられる。またこのイメージは後の Mrs. Baines の具体的な死の伏線であると考えられるし、上述の彼女に写えられた性格から判断するならば、彼女は死そのものを表象しているのではないか、という仮説が成り立つのではないかと考えられる。

ii)

次に Philip は散歩の帰り道、見知らぬ女性と一緒に居る Baines を発見する。

その Baines は <It was a happy, bold and buccaneering Baines, even though it was, when you looked closer, a desperate Baines.> と述べられており、地下室で妻と一緒に居る彼とは異って、一見幸せそうで大胆で、海賊の様に略奪でも働きそうな Baines である。しかし良く見ると絶望している Baines でもある。またしきりに促したり希望したり嘆願したり命令したりしている <urging, hoping, entreating, commanding,> 彼であって、妻に向っては受身でしかないのに、今は積極的な意志をもって相手に向う Baines である。

その側に居るのは白いレインコートを着た痩せてひょろ長い女性で、Philip に見当のつかない人 <she meant nothing to Philip> である。さらに <She sat there looking at an iced pink cake in the detachment and mystery of the completely disinherited> という描写の、超脱 <detachment> とか、廃嫡 <disinherited> という言葉で暗示されるように、何か世間とは断絶した人間離れのした存在という印象を与えている。相続人になれなくて、何に依って生きているのか見当のつかない人のもっている謎めいた雰囲気を与えている。さらに Philip が姿を見せたため、そくさと立ち去る彼女の姿——白いコートを着てつららの様に午後の光の中に溶け去っていく <like a small blunt icicle in her white mackintosh she stood in the doorway with her back to them, then melted into the afternoon> 姿には、中年男の恋人になるような女性の頼りなさ、儂さを感じられると共に、決して溶け去ることのない人間の描写であるだけに、一種の不気味さを伝えるように感じられる。これは Philip が二度目に彼女に会った時感じた、びくっとするような不吉な印象 <She frightened him like an unlucky number> からも理解され、どこか人間らしさの稀薄な Emmy の姿が浮んでくるのである。偽りの、束の間の幸福を Baines にもたらす Emmy を作者は以上のように形象しているのである。

iii)

次に Philip が経験したのは子供の様にはしゃいでいる Baines と共に過すたっぷりと楽しい一日である。Mrs. Baines が Emmy のことを確かめようと偽の口実で外出する。Baines は朝早く Philip を起こし、上機嫌でそわそわとして軽口をたたき興奮している。彼はアフリカで夢見たロンドンの一日を今日自分のものにできるからである。しかしそれは本当は彼の掌中におさめることはできない。ただいつもより少し間近で幸福を見つめている <Baines wasn't really happy; he was only

watching happiness from close to instead of from far away.> だけなのである。というのは夕方訪れた Emmy と三人で食事する時の描写にあるように、その幸福の背後に Mrs. Baines がいつも潜んでいるからである。彼女は本当は何処にも出かけてなく、この地下室にいて <she wasn't really away at all; she was there in the basement with them,> 三人の挙動をじっと見守り、一番効果のあるときにびたりと言葉をはさんで、三人の間に切り込むチャンスを待っている <biding her time for the right cutting word > という表現は、先に描かれていた悪意そのものという彼女の本質が、時の流れの裏側にびたりと貼付いている、人を不幸にする力としても表わされているように考えられる。それで Baines と Emmy が <They belonged; wherever they were they made a home.> というように幸な時を過ごし、Philip も快い疲れで安らかに眠りについた時、それを奪うかのよに Mrs. Baines は帰宅するのである。

身動きならぬ夢をみて、自覚めた Philip は夢の続きのような彼女を発見する。髪を乱し黒づくめの服装で、むっとするような息をする彼女は夢の中の魔女そっくりである。その姿には計って確かめようもない怒りと苦しみ of 淵 <a depth of bitterness and rage in Mrs. Baines you couldn't sound > があり、顔には残忍さと惨めさが表われている。つまり彼女はいつも人をやっつけてやりたいのに、逆に苦しんでいるのである。また Philip に二人の居場所を問いつめている折階下に聞える二人の囁き声に耳を澄ませている彼女の鏡に映る姿は次のようである。

and Mrs. Baines could see bitterly there her own reflection,
misery and cruelty wavering in the glass, age and dust and
nothing to hope for.

ローソクの光に照らされて鏡に映っているのは、残忍さと惨さが具体的に現われた彼女の姿であるとすれば <age, dust, nothing to hope for> をその本質としているのではないだろうか。老いていること、塵であること、希望することは何もないこと、彼女の生を支えているのは残忍さという人への悪意だけであって、彼女の内部には自らを明日へと向わせる力は生れてこないこと、これらは夫の愛を受けるに値しなくなった妻の悲惨な姿を表わしているが、ここには夫に見捨てられた妻以上のものを読み取ることができないだろうか。つまり年老いており、塵芥に等しい存在であり、

絶望のみ、ということに共通に認められるのは人間としての生の限界状況である。

<dust> が死体をも表わすことを考え合せるとき、以上の如く描出された彼女は人間にとって絶対的絶望である死を象徴していると考えられないだろうか。だから^(註1) Baines と争って墜落し、具体的に死を迎える彼女は当然の帰結である。

彼女の具体的な死は、しかしながら、彼女に形象された死と同一でないことに注目したい。この決定的瞬間を目撃して恐ろしくなって家を逃れた Philip を、彼女は追う存在として描出されているのである。例えば彼が公園でほんとに一息ついた時それが表われている。

But he couldn't stay; something stirred in the bushes and two illuminated eyes peered out at him like a Siberian wolf, and he thought how terrible it would be if Mrs. Baines found him there. He'd have no time to climb the railings; she'd seize him from behind.

木の繁みの中の光る眼、これは彼を追う恐怖の象徴であって、夢の中のシベリヤ狼から魔女の様な Mrs. Baines へと連想し、彼女への恐怖に駆られてまた逃げ出しているのである。これは彼女の存在が具体的な死によっては消滅しないことを物語っており、Philip が決定的な力をもった彼女（ホールに横たわっている Mrs. Baines）のところへ帰れないと思うのもそのためではないだろうか。つまり彼女の死は彼女の存在が意味していることを暴露したにすぎないと考えられるのである。以上のように理解するとき、さらに興味深いのは彼女が Baines と争う場面の描写である。

He hadn't time to think, he fought her savagely like a stranger, but she fought back with knowledgeable hate. She was going to teach them all and it didn't really matter whom she began with;

上文中の Mrs. Baines の憎しみを形容している <knowledgeable> は、ずるい、抜け目ないという意味であると同時に、物事を良く理解し、物知りで総明な判断力のあるということでもあろう。また彼女は周囲の人々に眼にもみせてやるつもりであると同時に、物知りだから教えることのできる存在でもあることを表わしている。だから彼女は今の自分の立場を、若くはないのだから夫の顔を打ってもよいが噛付いてはな

らぬ、押してもよいが蹴ってはならぬ、と客観的に判断できるのである。また、先の公園の場面で、Philip を追う <two illuminated eyes> は彼に Mrs. Baines の本質を伝える象徴でもあって、<illuminated> は啓蒙教化されているという意味をも表わすのであれば、彼女が知的にすぐれた存在として描出されていることが理解される。一方 Baines は他人と争っているかのように凶暴さをむき出しにして妻に向うのである。長い間一緒に暮らした妻が何処の誰かもわからない人のように、まるで未開人が他国の人に向うように争っている。<with knowledgeable hate> と <savagely> という開かれた精神と野蛮な未開の精神の争いとしても、Baines 夫婦の闘争が描かれているのである。

iv)

最後に Philip が見たおとなの世界の住人は、警官と一緒に帰ってきた彼に黙っていてほしいと必死に暗号を送る Baines である。彼は人を欺くような人間ではないが、Emmy のことを警官に知られないようにと願うのである。彼は本来ならば潔く真実が導くままに身を任せたであろう <he would have been quite ready to let the truth lead him where it would > が Emmy のために犬の様に Philip に頼む <begging for something like a dog> のである。過去の男らしい生活を自慢する Baines は今 Philip に最後の秘密を守ってくれるよう嘆願している。戦場の最後の哨所から電信を、こちらは Baines と送るように、楽しかった一日のこと、今までの親切を思い出させようとしている彼は、必死になって助けを求めているが今や置きりになる憐れな人間である。そして最後は警官に白状しろと云われて、頭をたれ、絶望して何もかも白状している Baines であり、Philip に見捨てられる存在として描かれている。

III

さて上述のようなおとなの世界を発見し、経験した Philip は大きく変化する存在として描出されている。第一に人生に対する感想の変化であり、第二に彼の変貌として表現されている。まず Philip の人生に対する考えがどのように変化したかをみてみたい。

Philip の人生は両親を送り出してドアが閉ったとき始まった。それは自分の家に

居ながら初めて訪れた旅人のように感ずる <He felt a stranger in his home> という適格な比喻で表現されている。その Philip の未知の世界に対する期待と不安が次の引用には良く描かれている。

Again he had the sense: this is life. All his seven nursery years vibrated with the strange, the new experience. His crowded busy brain was like a city which feels the earth tremble at a distant earthquake shock. He was apprehensive, but he was happier than he had ever been. Everything was more important than before.

遠くの地震の衝撃で大地がかすかに揺れているのを感じる町の様だとは、彼の敏感な感受性豊かな心を表わし、何もかも今迄になく大切であったという言葉には、これが人生だという満足感と共に不安ではあるがこれから迎えようとする事に向う精神的な逞しさが溢れている。このように期待と希望と不安のうちに迎え経験した人生は、あれが人生だったという嫌な記憶 <the repugnant memory, "That was life"> に変わってしまうのである。燃えるように輝かしい朝の、これが人生だ <The glowing morning thought "This is life"> という思いを嫌な思い出に変えたのは Baines の指導であり、嫌な記憶とは魔女の様な Mrs. Baines のホールに転落する姿である。それでは Baines を愛するが故に生じたおとなの世界との繋がりとそれに対する Philip の反応とを追って、この変化の背後を探ってみたい。

Philip を一人前の男性のように扱ってくれる Baines と一緒にいると、彼は自分がおとなになり、独立し、一人前の判断力がある <old, independent and judicial> ように思われてくる。そして彼は妻を忍耐している Baines を可愛想に思い、彼と二人きりで暮らせたらどんなに良いだろうと思うのである。しかしこれも人生だと思い、自分が主人であるかのように Baines に責任を感じる <suddenly he felt responsible for Baines, as if he were the master of the house and Baines an ageing servant who deserved to be cared for> のである。また Baines 夫婦の憎しみや彼には理解できない不思議な熱情 <a strange passion> が夫婦をとりまわっていることがわかったときも、これが人生だと受けとめているのである。この人生に対する気持が初めて動揺するのは、好きな Baines の、Emmy と

会ったという秘密を守り切れなかった時である。Philip は Baines と何でもわかった責任のとれるおとなのように、勿論言いはしないよ、わかってるよ <“Of course not,” “I understand, Baines.”> と約束したのに、Mrs. Baines の質問にうっかり秘密を明かしたことに腹を立て、そんな自分が惨めであり、失望したのである。そしてまた Baines は彼を信用したりすべきではなかったんだ <Baines oughtn't to have trusted him> というところには、自分はほんの子供なのだという Philip の苛立たしさを読みとることができる。だから Baines の秘密は守れなかったのに、Mrs. Baines が夫の恋人のことを知っているという秘密を守ってほしいと頼むとき人生の不公平であること <the unfairness of life> を知り、彼は惨めになってしまうのである。それはその不公平に対して Philip が無力であることを表わしており彼にできることは秘密とも責任とも無関係でありたいと願うことだけである。彼が飲んだ人生という予期した以上の多量の薬 <a larger dose of life than he had bargained for> は彼に人生を怯えさせる程苦かったのである。ここに第一の理由を知ることができる。Philip は教訓を学んだのであり、何もかも自分は手を出さず抛っておきたかったのだが、Mrs. Baines が外出した朝、あまりに喜んでいる Baines を見て心が迷う <He was divided by the fear and the attraction of life.> のである。それで楽しい一日を Baines と過ごしてまたおとなの世界へと巻き込まれてしまうのである。

そのおとなの世界で Philip が知ったのは恐ろしい勢いで追ってくる凶暴な力をもつ人生だった。Mrs. Baines が階下の二人の物音に気付いて、凄じい形相で子供部屋から出て行ったときの Philip の描写、夢の中で触れた何かに今彼は手で触れていた <he was touching something he touched in dreams> というのは、悪夢の中の恐ろしいことが現実に取り得ることを、彼が識ったのであり、自分の身に直接猛に襲いかかる力としてそれを受けとめていることを表わしている。さらに Philip がその力に耐え得ず、対抗して生きることはできないことを、人生に真正面から向うことが再びできないとしても <if he never faced it again in sixty years> という言葉が説明しているのである。その恐ろしい力は踊場で眠っている Philip めがけて Mrs. Baines が駆け上ってくる描写にも同様に表われている。

and cruelty grew at the sight of him and drove her up the stairs.
The nightmare was on him again and he couldn't move; he hadn't
any more courage left for ever; he'd spent it all, had been

allowed no time to let it grow,

悪夢が再び彼を襲い、彼は身動きならず、その時彼は人生に立ち向う勇気を使い果してしまった。もはや勇気が再びわいてくることはなかったのである。これは幼くて弱い Philip を圧倒し、彼の生きようとする力を全て奪ってしまう程強烈な悪夢の力である。文脈から判断されるように、この <nightmare> は Mrs. Baines の階段を駆け上る姿であり、彼女のもっている恐ろしさである。この恐ろしさはⅡで述べた如く、彼女によって象徴される死の力のもっている恐ろしさである。これが人生だという輝やかなしい思いが、あれが人生だったという嫌な思い出へと変化した第二の理由として、死の力とその恐ろしさを Philip が経験したことを挙げることができよう。

以上のような変化だけではなく、作者が少年 Philip を老人 Philip へと巧みにすり替えて描いている場面がある。それは二ヶ所あってその一は Baines との約束を守れなかったのに Mrs. Baines の約束を押しつけられたときであり、その二はこの作品の最終場面である。第一の場面は次のように描出されている。

“A 2A Meccano set, Master Philip.” He never opened his Meccano set again, never built anything, never created anything, died, the old dilettante, sixty years later with nothing to show rather than preserve the memory of Mrs. Baines's malicious voice saying good night, her soft determined footfalls on the stairs to the basement, going down, going down.

約束を守ったら 2 A 型の meccano set をあげますよという Mrs. Baines の言葉に、二度と meccano set では遊ぶまいという彼の決心と、彼女のおやすみなさいと云う意地悪な声と何かを決意したように静かに地下室へ遠ざかっていく足音を聞きながら眠り込んでいっている Philip を、60年後記憶がだんだん薄れて死んでいく Philip へと重ねて移行させながら描写しているのである。その Philip 老人はこのときの Mrs. Baines の思い出以外何もなく、何も組立てず、何も創り出さなかった年老いたディレッタントでしかない。次に最終場面は以下のように描出されている。

“Out with it,” the constable said, “who is she?”

just as the old man sixty years later startled his secretary,
his only watcher, asking, "Who is she? Who is she?" dropping
lower and lower into death, passing on the way perhaps the image
of Baines: Baines hopeless, Baines letting his head drop, Baines
"coming clean."

現実の場面としては、Philip はいろんな出来事のあった一日に疲れ果て、地下室の戸棚にもたれて眠り込んでいるのであって、〈who is she?〉というのは警官の尋問する声であるが、作者は、60年後死んでゆく Philip と今頃垂れて白状している Baines の姿とを重ねて時間的に二重に描出しているのである。死んでいく Philip 老人は先の場面と同様、唯一の看取人は秘書だけという閉ざされた生活を送った人間として描かれている。

作者がこの overlap の方法を用いたのは少年 Philip の今後の人生の有様を暗示するためであるのは確かである。人生に立ち向う勇気を失って道楽半分でも何事も済ませてしまう人生のディレッタントとして、彼自らのもの——家族、命を賭けた仕事——は何も残さないような人生を送る人間に Philip はなったのだと読みとることができるのである。しかし〈dilettante〉という言葉が用いてある別の場面を共に考えるとき、他の意味もあるのではないかと思われる。次がその描写である。

you could almost see the small unformed face hardening into the
deep dilettante selfishness of age

おとなに成りきらない小さな未熟な顔が年老いた奥底の知れない利己的なディレッタントの顔へ固っていくとは、柔い未熟さが成熟を知らないで、固い老獪さへと変化することで、少年 Philip から老人 Philip への変貌として形象されているのである。これは公園で二度と家へ帰るまいと決心しているところで、この変貌の背後には、責任など負わない、おとなはおとなの世界、自分は自分の世界を安全に守りたい〈Let grown-up people keep to their world and he would keep to his, safe in the small garden between the plane-trees.〉という願いがある。それは周囲の人々と関係しないで暮らすことであり、人生から、心遣いや人間関係から、打明け話や交際から退却〈retreat from life, from care, from human relationships, confidences and companionship〉して情心のない利己心〈merciless ego-

tism>へと閉じこもってしまうことである。さまざまな人間関係で表わされる人生の成熟のときを知らずに死を迎えることである。このようにここには時の満ちていないのに訪れる早すぎる老い或は死が描かれている。また幼なさや老いが表裏のこととして捕えられていると云うこともできよう。それは換言すれば人生の出発に人生の終焉を見ることであり、希望に溢れた生に絶望の死を見ることでもある。

IV

この様に考えてくると Baines は常に遠い憧れを抱きながら不満足な現実を忍従している捕われ人、東の間の幸福に手を出さざるを得ない我々の分身である。作者も彼を <the most sympathetic character> と言っている。^(註2) Mrs. Baines はその人間を捕える存在、人間が否定し認めたくない、死で表象される全ての条件を具えた存在である。Emmy は Baines には喜びであるが、警官の前で、みんな Emmy のせいだと Philip が言っているように Baines 夫婦に破滅をもたらす存在でもある。^(註3) Mrs. Baines が黒い魔女のイメージが与えられているのに対して、彼女は幸と不幸の両面そなえた白い服の謎の存在である。最後まで <who is she?> と Philip が問う存在である。しかし人生に真正面から向わなかった Philip であれば、Emmy は彼が人生で経験しなかったであろう生活の実際的な喜びを表わしているかも知れない。^(註4) それで Mrs. Baines と同様人間らしさの稀薄な彼女には白い魔女のイメージもかすかに感じられるのである。

Philip の変貌はおとなの世界が表わした死に支配されている人生に対する恐怖の象徴であり、成熟を知らない精神の表われでもある。少年と老人を同時に形象することにより生と死を暗示する方法は *The End of the Party* の Francis (死を識る存在であり老人のイメージが与えてある)^(註5) と興味深い対照をなしている。このような生のつまり死の扱い方の背後には、すでによく伝えられている作者の幼い頃体験した人生への倦怠、失望がうかがわれる。そこで次に問題になることは、真の意味での生を得るために、人間が本当に成熟するために、作者はどのような手段でどのような人間を形象して、生きてゆくかということである。この問題については稿を改めて考察したいと思う。

* * * * *

註1 旅行記 *Journey Without Maps*, p.213 でアフリカの bush devil 一善でも悪でもない Power を子供の夢に現われる恐ろしい力をもつ、逃れずに認めねばならない魔女と述べている。Mrs. Baines のもつ力とこの力とを結びつけて解釈することもできる。Carolyn D. Scott はこのような見方をしている。Graham Greene, Robert O. Evans ed, p.236 University of Kentucky Press, 1963

註2 *The Fallen Idol* の序文。 *The Third Man and the Fallen Idol*, 1950 Heinemann: London.

註3 呪術—魔女と異端の歴史、P. ヒューズ、早乙女忠訳、筑摩書房 1968

註4 同上

註5 「英文学研究」第7号、梅光女学院大学英語英文学会、1971